

「留学生の母親」運動 現在・過去・未来

八星恵子（「留学生の母親」委員会副委員長）

コロナ禍が全世界を覆っています。国・民族・性別にかかわらず世界中が直面している病です。「留学生の母親」運動でも今年度は形態を変えて新しい方法を考え、試行錯誤しながら取り組んできました。

留学生は学校・大学の授業がオンラインになって、対面で友人や教師に接する機会が減ったことに加え、アルバイトの時間が制限されたり、休職・解雇になったり、故国へ帰国できない・一時帰国したら再入国できなくなった、就活が思うようにできない、故国の家族も今までのような仕送りができなくなった、など様々な状況を抱えています。

そのような状況下での運動の歩みを東京 Y W C A 新聞 12 月号「コロナ禍の留学生と共に」で報告しています。皆様に「留学生資金」「留学生奨学金」へのご寄付をお願いしたところ、多くの方が応じてくださいました。ありがとうございます。

「留学生資金」はこれまでのところ、組み合わせ留学生延べ 14 人に供与しています。アルバイトができなくなり、家族からの仕送りもなく、学費や生活費に事欠く留学生の実情を組み合わせの母親が聞き取っての申し込みでした。大変であるのに心配をかけまいとふるまう留学生に少しでも助けになれば、と応援する気持ちでいっぱいです。

「留学生奨学金」は例年より人数を増やし 6 人に支給。これは奨学金制度の少ない 1、2 年生が対象。さらに「特別奨学金」として 20 人に支給しました。こちらは卒業を控え就活中の最終 2 学年が対象。短い募集期間に日本各地から、しかも 9 カ国の留学生から 82 通の応募があり、経済的支援を求めている留学生の多いことを実感しました。

「留学生談話室」はオンラインで 6 月から再開しています（東京 Y W C A 新聞 10 月号「オンライン留学生談話室への取り組み」参照）。さらに「電話／Line で日本語を楽しもう」が 7 月から始まりました。遠くからでも参加でき、1 対 1 で日本語を話す機会の少ない留学生に好評です。

毎年クリスマス会で行ってきた「日本語発表会」を今年はオンラインで開催。7 人の留学生が思いを発表してくれました。オンラインのおかげで広島からや日本に再入国できずにいる韓国からの発表者もありまし

た。自粛生活で孤独になりがちなか中でポジティブな生活を志し、有意義に過ごすことを考え、変わったからできることを見つけた・活動を始めた、不安を共有する仲間ができた、この経験を活かしたい、中国と日本の中で助け合いの交流を目にして希望の陽の上がることを確信した、など。その他、家族のこと、大きな目的のための勉学のこと、大切に思っていることなど、画面を通して、一人ひとりの発表をしっかりと聞くことができました。

2月に予定している「母の会」では留學生の現状をより詳しく知って、私たちができることが何かを改めて考えたいと企画しています。

「留學生の母親」運動は、戦後日本人の持つアジアへの差別意識の反省から、お互いに知る機会の少なかつたアジアからの留學生に家庭を開放し、ありのままの日本を知ってもらい、理解を深めたいと考え、1961年に一人の留學生と一人の「母親」との交流から始まりました。その後アジアでの紛争・政変が続き、留學生が必要とするときに少しでも力になれるように資金を持つことを願い、バザーや募金を基に1974年に「留學生基金」「留學生資金」の前身である「特別基金と福祉資金」、1982年に「留學生奨学金」制度ができました。2021年度は60周年を迎えます。

留學生や母親をとりまく環境や意識は年と共に変化し、最近のスピードは目をみはるばかりです。それでも人と人との出会いと交流が平和の基であることを信じ、平和の種をまき続ける活動に連なっていきたいと思えます。